

しゃくちょうくう
 釈迢空の歌碑

多賀神社の手水舎の側に釈迢空の歌碑があるのをご存知でしょうか。昭和49年10月、多賀神社の当時の宮司である青山大麗によって建てられました。

歌人釈迢空は本名折口信夫。明治20年大阪に生まれ国学院大学国文科を卒業、国学院、慶應義塾両大学の教授を歴任、国文学者、民俗学者として知られた人です。

釈迢空は早くから短歌に親しみ、北原白秋らと歌誌「日光」を創刊、詩集「古代感愛集」により芸術院賞を受賞、さらに演劇にも手を伸ばしその芸術的活動は多岐にわたりました。

しかし、釈迢空の本領は折口信夫の本名でなされた国文学・民俗学の研究にあったといえましょう。国文学の分野では、古代文学の発生と芸能、宗教の起源についての貴重な研究を残し、民俗学の分野では、柳田国男の片腕となってその開拓者としての役割を果たし、ともに高く評価されました。

歌碑の表面には「多賀の宮みこしすぎゆくおひかぜに われはかしこまる神わたり給ふ 迢空」裏面には「筑紫の日若おどりを見にゆかん ことを想えり三とせの後に」という短歌が刻まれています。

碑の歌は、昭和24年に弟子の伊馬春部(木屋瀬出身の放送作家で旧制鞍手中学校を卒業)に案内され、多賀神社を参拝し、御神幸を見学して詠んだものです。

「直方碑物語」N219ノ
 市報のおがた 令和2年11月1日発行

3/26(土)開催予定の「ふるさと再発見!講座」では、今回紹介した釈迢空の歌碑を含めた、直方市にある句碑・歌碑を歩いて巡ります。詳しくは館内配布のチラシをご覧ください♪

筑豊の民話 -流れついた神様-

遠賀川とその支流は明治末期から大正初期にかけて改修工事により堤防が築かれ、洪水があっても沿岸の住民は水害を免れるようになりました。しかしその頃、近年にない大洪水が起こり、どうどうと流れる濁流には、根こそぎになった大木や、屋根の上で泣き叫んで助けを求める人達を乗せた納屋なども流されました。一夜明け、感田村(直方市感田)の庄屋は村役人と一緒に被害の状況を見回り、川辺に村人が集まっているので水死人でも流れ着いたのではないかと近づくと、村人の一人が「庄屋様、神さまが流れて来とります」と知らせました。調べてみると、木造の祠で扉には嚴重に錠がしてあり、祠自体には何ら傷もありません。扉を開けてみると中には神体の鏡があり、内側に「豊前国田川郡安宅村(現在の田川郡川崎町か)」の土地名、この祠を寄進した人たちの名前が書かれていました。

筑前国感田村では、日頃信仰している神さまの祠が流されて困っているだろうと、安宅村に連絡の使者を出しました。使者が帰ってきて伝えたのは「洪水から村を守ってくれるどころか、真っ先に流されてしまうような神さまは村に置けません。自由に処分してください」というけんもほろろな返事でした。

感田村は、これも何かの縁と祠を社にして祭り、安宅村から流れてきた神さまなので「阿高宮」と社名をつけました。現在の筑豊電鉄感田駅の後方の丘上にあります。

「ふるさと筑豊 -民話と史実を探る-」 N388 千



きむらりよくへい たねださんとうか 木村緑平と種田山頭火

木村緑平（1888～1968）は、現在の柳川市に生まれました。長崎医専在学中に荻原井泉水に師事し、緑平という号を与えられました。

種田山頭火（1882-1940）は1924（大正12）年得度し、全国を行乞しながら、荻原井泉水主宰の同人誌「層雲」に句を投稿しました。山頭火の句は同人の心を惹きつけ、放浪で一文無しになった山頭火を歓迎し、支援しました。なかでも田川郡糸田町の明治鉱業所豊国炭砒中央病院の医師であった木村緑平とは、「心友」といえるほどの深い結びつきが生まれました。山頭火に出会ったのは大正8年、無銭飲食をした山頭火の身元引受人となったことからでした。金銭の支援だけでなく、あたたかいもてなしは山頭火の心を満たし、「南無緑平者如来」と敬愛していました。

「緑平者に」として「逢うてうれしい ポタ山の月がある」などの句を残しています。「緑平よ、あなたのあたゝかさはやがてわたしのあたゝかさとなってゐる。アルコールの力を借りて、ぐっすり寝ることができた。そのアルコールは緑平者のなさげ。」（行乞記・昭和8年6月8日より）

山頭火の日記には、糸田町へ行く途中、直方に立ち寄ったことも記されています。昭和7年4月24・25日、直方の新町あたりにあった藤田屋に泊まり、「夜は三杯気分で雲心寺の和尚を攻撃した。酒、酒、酒よりも和尚はよかった」とあり、「あんまりうつくしいチューリップ枯れた」の句を残しています。

緑平は昭和17年柳川へ戻りましたが、自由律俳句の俳人として昭和38年層雲賞を受賞しました。雀を愛でて多くの句を残し、雀の俳人と呼ばれました。



はじめの一步 ～郷土資料の紹介～

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。
郷土の歴史や文化に興味をもってください。きっかけになればと思っています。



「新 火を産んだ母たち」

井手川泰子/著 海鳥社 N567 子

かつて筑豊の炭鉱で働いていた女坑夫たちからの聞き書き。女たちは主に中小の炭鉱で、死と隣り合わせの地底の暗闇の中、親のため子のために懸命に働いてきました。過酷な生活を支えたのは、同じ働く女たちでした。

炭鉱の閉山とともに忘れられていった女坑夫の生きざまを次の世代に伝えていきたいと思います。

直方市立図書館 直方市山部 301-11 コミュニティのおがた内
TEL 0949-25-2240 FAX 0949-23-3902